

# 上代日本文学における夢

## 旅人と家持、その作風の相違

佐々木 綾

はじめに

現存するものでは、日本最古の歌集と言われている『万葉集』には、「夢」という語が用いられた歌が約百首ほどある。万葉集中では、「夢」は万葉仮名で「伊米」「伊目」などと表記され、その音は「ユメ」ではなく「イメ」であった。イメは「寐目」で睡眠中の目のことである。

「夢」という語が使用されている歌は、「夢の通い路」という言葉があるように、恋人に会う夢、つまり恋愛の歌、相聞歌が最も多く、八十四首ほどある。八割以上が恋の歌で占められているということであり、当時の恋愛において「夢」が特別な意味を持っていたということが窺える。その背景には、相手が自分を思っていると、夢にその相手が現れる、逆に言えば、自分が相手を思うと、その相手の夢に現れるという俗信があった。万葉集の相聞歌で歌われる「夢」は前述のような事情のもと、恋愛において、恋人に

会えないときの愛情の確認、魂が通じ合っているかどうかをはかるものであると考えられる。

ところで、夢を詠み込んだ歌の数が最も多いのは、大伴家持であるが、彼の歌は、相聞歌でありながら、魂の通じ合いを確認するといった内容のものではなく、他の歌人の夢の歌とは違う何かを感じられる。また家持の父親、旅人の作品にも、他の歌人にはない、異質さがある。

この二人は親子でありながら、その作風はまったく違っていいほど違う。

まず、それぞれの特徴が現れた夢の歌の代表作品を挙げてみる。旅人の場合は「此の琴夢に娘子に化りて曰はく」で始まり、夢の中に乙女が現れ、歌のやりとりをするという「大伴淡等謹状」の梧桐日本琴の歌、またこの歌と同じ構成の梅花宴追和歌の四首のうちの一首、「梅の花夢に語らくみやびたる花と我思う酒に浮かべこそ（巻五 八五二）」という歌が旅人の歌風の特徴のはっきり現れた歌で

あるといえる。

一方、旅人の息子、家持には相聞歌が多い。中国的な感性を取り入れた作品の中でも旅人と対照的なのが、「夢の逢ひは苦しくありけりおどろきて搔き探れども手にも触れねば（巻四 七四一）」というものであろう。

では、この親子二人の歌風にはどのような違いが見られるのであろうか。

本稿では、大伴旅人、家持という親子の代表的万葉歌人の作品に焦点を当て、両者の夢の歌の相違について論じてみたい。

## 一、家持の歌と中国文学

旅人と家持親子の作風の違いは、自身の作品への中国の文学の取り入れ方の違いであると言えるのではないだろうか。

中国には膨大な文献があり、夢に関するものも非常に多い。その中でも、旅人、家持親子に影響を与えているのは、まず第一に『遊仙窟』、そして「文選」の中の『高唐賦』である。また、中国の一般的な夢の捉え方の参考にするために、『玉台新詠』の作品も見ていこうと思つ。

### (1) 『遊仙窟』と万葉集

『遊仙窟』は張文成が著した唐代の神仙的通俗小説であるが、奈良時代初期ごろ日本に伝えられ、日本の文学に影響を及ぼした。

『遊仙窟』の夢の場面は次のようなものである。

少時にして坐睡すれば、則ち夢に十娘を見る。驚き覚めて之を攬れば忽然として手を空しくす。心中悵快として、復た何ぞ論ずべけんや。

余、因つて詠じて曰はく、

夢の中に是れ実かと疑ひしが、覚めて後忽ち真に非ざりき。

誠に腸断へんと欲するを知りぬ。

窮鬼故に人を調かすや、と。

天与の美貌の上に教養を兼ね備えたすばらしい女性十娘に恋い焦がれる男が、うたた寝をして夢に彼女を見た。捕まえようと手を伸ばしたが何物にも触れない。その不満を詩に述べたという場面である。これが、家持の、

夢の逢ひは苦しくありけりおどろきて搔き探れども手にも触れねば（巻四 七四一）

という歌となった。そしてもう二首、家持のものではないが、

現にも今も見てしか夢のみに手本纏き寝と見れば苦しも(巻十二 二八八〇)

愛しと思ふ吾妹を夢に見て起きて探るに無きがさぶしさ(巻十二 二九一四)

というものも同じ身上を歌ったものである。

万葉集には約百首ほどの「夢」の歌があり、その八割以上が恋の歌であるが、「夢で逢いたい」「夢に逢いに来て」という歌が多く、以上の三首のようにはかなさを歌うことは例外的なことである。男が恋人の女性を訪ねるといふ妻問婚が一般的であった当時、交通事情や、人目を憚らなければならぬという理由から、毎日のように恋人同士が逢うことは不可能であった。現実の世界では恋しい相手に逢えないということが前提となつて、「現には逢ふ縁もなし夢にだに間なく見え君恋に死ぬべし(巻十一 二五四四)」という歌や、「如何ならむ名を負ふ神に手向けせばわが思ふ妹を夢にだに見む(巻十一 二四一八)」と言う歌が生まれるのである。

ところが、右の三首は、恋人に逢つた嬉しさが「夢である」と判明したことで苦しさに変化し、その目覚めたとき

の無念さを歌にしたものである。これら三首の心情は夢の歌の中でも特殊なものと云つてよいであろう。

七四一、二八八〇、二九一四番の歌は、『遊仙窟』の前述の同一の場面对応していると考へてもよい。中国小説のこのひとつの場面を、「歌」という形式で、やまとことばで少しづつ異なる言い回しを用い表現しているのではないだろうか。そうであるとすれば、夢の逢瀬をむなく感じるその原点は、中国の文学にあったということが可能であろう。

では、他の中国文学における「夢」はどのような位置を占めているであろうか。

## (2) 『玉台新詠』と夢

『文選』よりもやや遅れて陳の徐陵が撰し、六朝末期に編纂された詩集『玉台新詠』には、夢で逢おうと願うよりも、恋しい人に逢つたが、それは実は夢であった、といった詩が多い。

たとえば、夢の中では会えるが目覚めると何もない、という詩は、以下のようなものがある。

飲馬長城窟行一首(馬を長城の窟に飲ふ行一首)

青青河辺草 綿綿思遠道 青青たる河辺の草、綿綿

遠道不可思 宿昔夢見之

として遠道思ふ

遠道思ふ可からず、宿昔

夢に之を見る

夢見在我旁 忽覺在他郷

夢に見れば我が旁に在り、

忽ち覺むれば他郷に在り

(以下省略)

三行目のところで、夢の中では、あの人はわたしの側にいるが、覚めたときにもう他郷の人となってしまう、といっている。

夢見故人(夢に故人を見る)

覺罷方知恨 人心定不同

覺め罷みて方に恨みを知

る、人心定めて同じからず

誰能對角枕 長夜一邊空

誰か能く角枕に對して、

長夜一邊空しからん

この場合、「故人」とは亡くなった人のことではなく、

「古くからの知り合い」という意味である。夢の中でなじ

みの客に会って、夢からさめた後の女の心を述べたもので、

「あなたに会った夢が覚めてしまつてから、はじめて恨め

しくなつた。人の心というものは定めし違つているのだろ

う。角飾のある枕に對して、長い夜の間、一方だけ空しくあいているのには誰がこらえきれましよう」と心情を詩に綴っている。

万葉集中の相聞歌では、「夢の如」「夢かと思ふ」という夢そのもののはかなさの表現は見られても、「目が覺めてあなたがいないなんて恨めしい」「あれは夢だったのかと悲しくため息をついた」という心情のものは、家持の七四一番の歌が最初である。やはり、この「夢の逢瀬」イコール「空しく寂しい」と捉えるようになったのは、中国文学の影響であると考えられる。

《参考》 八木沢元 著『遊仙窟全講』

(明治書院 昭50・1)

新釋漢文大系『玉台新詠 上』内田泉之助

(明治書院 昭49・8)

『玉台新詠 下』

( ) ” ” 昭50・5)

## 二、旅人の歌と中国文学

一方、家持の父旅人の歌の特徴は何であろうか。旅人は

中国の文学の影響を受け、他の歌人の歌には見られない一風変わった夢の歌を詠んでいる。百首ほどある夢の歌の中で、他の万葉歌人が歌に詠んだような夢が実際に体験として見られた夢なのかどうか確かめる術はない。それでも、相聞歌において、恋人に逢う夢、死んだ人を恋しく思い、夢を見るということは可能性としては十分に考えられ、見たとしても不思議ではない。しかし、旅人の夢の場合はそうではない。琴や梅といった無生物が人間に化身し、夢に現れるといった構図は、旅人が実際に見た夢であるとは考え難い。他の万葉歌人の歌の夢を「真実の夢」と捉ええるとすれば、旅人の夢は「虚構の夢」ということができる。

### (1) 旅人の夢

旅人の歌の中で、「夢」という語が詠まれているものは四作品ある。その内の二つに旅人が大宰の帥であった時代、京にいる藤原房前に送った以下のような書簡がある。これが他の歌人とは違う旅人独自の夢の歌なのである。

大伴淡等謹みて状す

梧桐の日本琴一面 対馬結石山の孫枝なり

此の琴夢に娘子に化りて曰はく、余根を遥島の崇き巒に託け、幹を九陽の休き光に晡す。長く煙霞を帯

びて、山川の阿に逍遙し、遠く風波を望みて、雁と木との間に出入す。唯し百年の後、空しく溝壑に朽ちなむといふことを恐るらくのみ。たまたま良匠に遭ひて、削りて小琴に為らる。質の麗く音の少しきなることを顧みず、恒に君子の左琴を希ふといへり。即ち歌ひて曰はく、

如何にあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上我が枕かむ(巻五 八一〇)

僕、詩詠に報へて曰はく、

言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるべし(同 八一〇)

琴娘子、答へて曰はく、「敬しみて德音を奉りぬ。

幸甚幸甚といへり。片時にして覚き、即ち夢の言に感じ、慨然として止黙あること得ず。故に公使に附けて、聊に進御る。

天平元年十月七日、使に附けて進上る

謹通 中衛高明閣下 謹空

琴が乙女に化身して夢に現れ、「どんな時になったら、私は音楽を解する人の膝の上を枕にすることができるといふか」と問いかけ、それに「僕」が「もの言わぬ木ではあっても立派な君の愛用の琴になるでしょう」という歌

で答え、また乙女がそれに応じるといふ小さな物語形式の作品である。

そしてもう一首、旅人の歌で、この琴の書状と似通った歌がある。それは梅花宴追和歌の四首のうちの次のような一首である。

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこ  
そ（巻五 八五二）

梅の花が夢に現れて語ることには、「私はみやびな花だと自負しています。どうか酒に浮かべてください」という意味であるが、これは琴の書状の前半部分、「此の琴夢に娘子に化りて曰はく」と同じ発想であるだろう。この八五二番の歌には、娘に化身したと記載されているわけではないが、歌の主題は梅の花である。琴の場合と同じようにたおやかな乙女に化身した構図であると考えられる。

この梅の歌は、琴の歌よりも後のものであるから、旅人は以前に琴の歌で文章で表現した部分を、平明で簡潔に、そして美しさは失わずに歌にしたのだと言える。

旅人の夢の歌と万葉集中の他の歌との最大の違い、それは旅人のものは明らかな「虚構」であるということである。万葉集中の他の相聞歌に詠まれた夢が、実際にその本人に

よって見られたものであるかどうかはわからないが、恋人を夢に見るといふのは、十分有り得ることである。しかし、旅人の夢の歌は物語的虚構性が強すぎる。後に詳しく述べるが、『文選』には、神である女性との出会いがテーマである「高唐賦」という作品がある。この物語を知った旅人が、同じ素材で日本の文学での表現を房前に送る書簡で試みたのではないか。だが果たしてただそれだけだろうか。

この琴の歌が作られたのは一見して天平元年だということとがわかる。旅人が没したのは天平三年、旅人の最晩年の歌である。この琴の書状には、中国文学の影響が指摘され、旅人の中国文学に対する造詣の深さが窺える。また、神仙的なものを愛した旅人らしい作品でもあり、この書簡は、今まで蓄積してきた教養知識、都に対する思い、旅人が愛してきたものの集大成ともいえるものに仕上がっている。

旅人のこの夢の歌は、万葉集の夢の歌群ではどのような位置付けがなされるのか。

歌の世界が「夢の中」であることに特別な意味はあるのだろうか。

## (2) 神仙思想と旅人

旅人の琴の歌は、『文選』の中の「高唐賦」「神女賦」の影響が指摘される。前章の家持の作品のところで掲げた

『遊仙窟』も現実の女性ではない、神女ともいふべき女性との夢での逢瀬であり、その点で旅人も影響を受けている。

行雨

本是巫山来 無人睹容色

本是れ巫山より来る、人の容色を睹る無し

唯有楚王臣 曾言夢相識

唯楚王の臣有り、曾て言ふ夢に相識ると。

この神女はもともと巫山の奥から来たもので、誰も彼女の姿や顔色などを見たものはなかった。ただ一人楚王の臣で、宋玉という人がいて、夢の中で彼女と識り合いになつたということがあるだけだ、という意味である。

浮雲

可憐片雲生 暫重復還輕

憐む可し片雲生ず、暫く重く復た還た輕し。

欲使襄王夢 応過白帝城

襄王の夢をして、白帝城を過ぐべからしめむと欲す。

愛すべき一片の雲が浮かんで来た。その雲はしばし重く

垂れ、また軽くただよう。これは楚の襄王の夢の中で、王に白帝城へ通うことのできるようにとしむけたものらしい、という内容である。

また「高唐賦」の夢の物語は、詩そのものではなく、序の部分で語られる。

昔者、楚の襄王、宋玉と雲夢の台に遊ぶ。高唐の觀を望むに、其の上に独り雲氣有り。曉く直ちに上り、忽ち容を改め、須臾の間に、変化して窮まり無し。王玉に問ひて曰く、此れ何の氣ぞやと。玉対へて曰く、所謂朝雲といふ者なりと。王曰く、何をか朝雲と謂ふと。玉曰く、昔者、先王嘗て高唐に遊び、怠りて昼寝ね、夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり。高唐の客為り。君高唐に遊ぶと聞く。願はくは、枕席を薦めんと。王因つて之を幸す。去るとき辞して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。且には朝雲と為り、暮れには行雨と為り、朝朝暮暮、陽台の下にありと。旦朝に之を視れば言の如し。故に為に廟を立て、號して朝雲と曰ふと。(文選卷第十九)

襄王と宋玉の会話である。雲夢の台から高唐の高殿を眺めると、その上には雲の気だけがあり、それはしばらくの間にさまざまに変化し、とどまることがない。王が「これ

は何の気か」と問うと、玉は「これが朝雲というものです」という。さらに王が「朝雲とは何か」と尋ねたので、先の王の時代にあった不思議な逸話を語ったのである。

夢に一人の女性が現れて言う。「枕席を近づけさせてください」。そこで王は彼女を寵愛するのであるが、この女は実は、雲と成り、雨と成るといふ神仙のものであった。

旅人は以上のような中国文学の知識をもとに、神や精霊の類いと考えられる女性を主題に歌を詠んだのである。旅人は、和歌の世界で効果的に漢文を利用しながら美しい夢の世界を作り上げたのだといえる。

旅人の琴の作品の中には、中国的な神仙世界への憧れが見られる。旅人には、琴、梅の歌と同じく虚構であると考えられる「松浦河に遊ぶ」（巻五 八五三〜八六三）という作品があるが、これは漢文の序と十一首の歌で構成されており、夢の中ではなく、直接の経験として描かれる。

主人公の男が松浦河を遊覧していると、容姿端麗な乙女らに出会った。仙女ではないかと問うと、自分たちは漁夫の子で、山水を友として魚を釣り、夫となる貴人を待つていたと答える。以下、その男、蓬客、乙女ら、後の人による歌が続くのであるが、この物語は語句、内容ともに、中国の小説『遊仙窟』の影響を受けた明らかな虚構である。

この「松浦河に遊ぶ」は実作者が明示されていない。し

かし、伊藤博氏の、

この松浦歌群は、のちに、都の吉田宜や筑前国守の山上憶良に旅人作として贈られている。だからこの面から見るとき、作品の完成までに、某人の加勢や参加があったとしても、できあがったものとしては、その実作者は、あくまで旅人と見るべきであろう。みずからが主役となっていない作を旅人が我が物顔に心知れた歌友に贈るわけがないと思う。<sup>1)</sup>

この作品の作者が旅人であるとする、旅人はこういった仙女、仙境という霞がかったような世界をたいへん好んだということが知れる。他の歌に混じって、このように虚構の、小説のような歌、中国文学の語句を用いた歌などがあることが旅人の歌の特徴であるといえる。その特徴が房前に送る書簡や梅花の宴の歌で顕著に現れたと言えるであろう。

### (3) 旅人が見た夢

旅人が詠んだ夢の歌は、万葉集の夢の歌群においてどのような位置付けがなされるであろうか。

旅人の夢の歌について論じてきたが、琴の書簡、また梅花の夢の歌は、明らかに創作されたものであり、虚構で

あるという点で極めて異色のものである。そしてその点こそが旅人によって開拓された新境地なのである。旅人以前の夢の歌は、自然発生的に実際に見られたと考えられる夢の歌であったが、旅人は虚構の夢を歌に詠み、自分自身が作り上げたイメージを言葉で表現した。それはより文学的であり、且つ芸術的であるとは言えないか。志村良治氏は、旅人のこの「淡等謹状」の作品について「日本の文芸のうちには、はじめて夢の世界を自覚的に取り入れ」たものであり、「この意識的な虚構の設定は、後世の作り物語の祖型をなすものとして注目される」としている。また、志村氏は、

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこ  
そ（巻五 八五二）

の一首を挙げ、

ここに中国の故事の、まったくの敷き写しではない、旅人の創造性を見ることができであろう。夢を架空の世界と連結するのは、いままではなかった関係を旅人が日本の詩歌の中に歌い入れたことを意味する。<sup>3)</sup>と述べている。

中国文学から素材を得、それを歌という最も日本的な方

法を用いながら、その美しさを損なうことなく表現し得たのは旅人の手柄である。

「淡等謹状」と梅の歌は他の夢の歌とは異なり、「虚構」であることに意味があり、そこに価値が見いだされるのだ。

旅人のこの琴の書状に対して、房前は旅人の趣向を汲んだ丁寧な返信を送っている。

跪きて芳音を承り、嘉權交深し。乃ち龍門の恩、また蓬身の上に厚きことを知りぬ。恋望の殊念は常の心の百倍なり。謹みて白雲の仕に和へて、野鄙の歌を奏す。房前謹状す。

言問はぬ木にもありとも我が背子が手馴れのみ琴地に  
置かめやも（巻五 八二二）

十一月八日に 還る使ひの大監に付く

謹通 尊門 記室

「もの言わぬ木でもあつても貴方様のご愛用の琴を地面に置くようなことはしません」という意味である。旅人はこの琴の書状のやりとりから二年後、天平三年に六十七歳の生涯を閉じている。

- (1) 伊藤博『萬葉集釋注三』(集英社 平7・11)  
 (2) 志村良治「遊仙窟」と「淡等謹状」―文化受容における個人の場合― 中国詩論集 志村良治著  
 作品集1(汲古書院 昭61・2)  
 (3) (2)と同。

《了》

中国文学の取り入れ方の違いが、この万葉集代表的歌人親子の作風の違いを生み、その違いこそが、万葉集の夢の歌をより味わい深いものにしてしているのである。

《参考》全釈漢文大系27『文選(文章編)二』 小尾郊一  
 (集英社 昭49)

## 結 論

大伴旅人、家持親子の「夢」を用いた歌を中心に見てきたが、この両者の違いは、すなわち中国文学の取り入れ方の違いだということが明らかになったといえるであろう。

中国の文学において、夢は詩の中にあつた。しかし日本の文学におけるものとは違い、「夢の逢瀬」は、より「はかなさ」が強調されている。この夢の「はかなさ」を自身の作品に取り入れたのが、大伴家持である。

そして一方、夢の中での神女との出会いがあり、その物語は、日本に渡り、旅人の琴の書簡、梅の花の歌となって万葉集に吸収された。旅人は「虚構の夢」「物語」を歌にすることで、新たな境地を開き、万葉集夢の歌群の文学的レベルを高めた。